

個人情報保護と オーティーエスの今

企業に個人情報の保護が厳しく求められている昨今、オーティーエスはこの問題についても現場レベルから徹底した活動を続けています。今回のオープントークスではオーティーエスの現場での個人情報保護事情にスポットを当ててみました。



Newspaper of the Month (September 2016)

OpenTalkS!

株式会社オーティーエスが贈る
ファッション・アパレル物流通信
Vol.081 2016年9月号
発行人:田中☆ユウイチロウ

プライバシーマークの取得

企業の個人情報保護活動といえば「プライバシーマーク(以下「Pマーク」)」を思い浮かべるかと思えます。



Pマーク制度とは経済産業省のガイドラインに適合した「個人情報」の取り扱いが適切にできていることを第三者の立場で評価して認定する制度です。オーティーエスがPマークを取得したのは2007年。二年に一度の厳しい審査を4度通過しています。(次回更新は2017年)

情報漏えいの代償・・・

個人情報の流出は情報元の個人だけでなく、企業にも非常に大きな損失を与えることとなります。三菱UFJ証券顧客情報売却事件では対象者5万人に対して100000円を賠償。記憶に新しいベネッセコーポレーションの個人情報漏えい事件では2895万人に500円の賠償と巨額の賠償金が発生しています。経済的な損失はもちろんですが、企業としてさらに重大なのは長期にわたりエンドユーザーからの信用を失うという点にあります。特にEC事業者様にとっては個人情報こそ

が企業活動の生命線!

お客様よりEC物流を受託しているオーティーエスの個人情報保護活動をレポートします。

Pマーク委員会の取り組み

オーティーエスの個人情報保護の要は【Pマーク委員会】です。

各センター4〜6名の社員で構成され、個人情報保護の強化を目的に日々様々な活動を行っています。今回はその具体的な活動のいくつかを紹介いたします。

◆月に一度の自主監査

毎月ひとつのセンターを回り、Pマーク委員による抜き差し監査が行われます。9項目のチェックリストに基づき厳しい目線でチェックしていきます。不備があればセンターに指摘事項として改善を求めます。



▲廃棄の資材の個人情報も見逃しません!!



▲7月に実施した自主監査風景。(新砂センター)

自主監査 チェックリスト

1. 個人情報のある不要な印刷物がそのまま掲示されていないか
2. 廃棄の資材に個人を特定できる送り状などが貼られたままになっていないか
3. スクリーンロックは設定されているか
4. 個人情報のあるものは適切に管理されているか
5. 個人で管理すべき個人情報(名刺、社員証等)が適切に管理されているか
6. ゴミ箱に個人情報のあるものがそのまま捨てられていないか
7. 個人用ロッカーやキャビネットは、施錠されているか
8. ノートPCに対して定められた対策が確実に実行されているか
9. 机の上に個人情報が放置されていないか

◆廃棄送り状への目隠しの徹底

廃棄ダンボールに貼付された送り状の個人名、アドレスもすべて漏らさず目隠しスタンプされるからの廃棄が徹底されています。



◆掲示物の個人情報もすべて目隠し

パディさん(パート社員のこと)の出勤簿や掃除分担表など社員の個人情報であっても目隠しを徹底。オーティーエスは従業員の80%がパディさん。どんな個人情報でも重要に扱う意識をパディさんから持つてもらうことが、個人情報流出を未然に防ぐ上で必須になります。



▲個人情報の書かれた掲示物には、写真のような表紙が付けられ、目隠しされている。写真は新砂センターのパディさん出勤簿

◆ロッカー、引出しの施錠、デスクの管理

すべてのロッカーや引き出し、キャビネットは施錠管理が徹底されており、業務中でもデスク上には個人情報は見当たりません!



▶パディさんのロッカーすべてに「施錠」の啓蒙POPが貼られ、普段からロッカーやキャビネット施錠管理の意識を持っています。また抜き差しでの施錠チェックも行われています。



▶Pマーク委員の打合せの様子。各センターのPマーク委員で会議をしたのち、各センターの代表が集まり、会社全体での対策や方向性を協議します。自主監査もこのタイミングで実施されます。

座右の銘



座右の銘、それは人が生きていく為の指針
人生が人の数だけあるように、座右の銘も人それぞれ
今回はOTS代表取締役 田中の座右の銘をご紹介します
その言葉に込められた思いに迫ります。

人は城
人は石垣
人は堀
情けは味方
仇は敵なり

名将 武田信玄の言葉と伝えられています。
どんなに強固な城や石垣があっても、人心が離れてしまえば世の中を治めていくことはできない。大切なのは『人』そのものであり、他人を思いやることで結果的に国は強くなり、逆に仇なせば国は弱体化し滅んでしまうという意味が込められています。武田家の家臣団の多くは、いわゆる主従の関係ではなく、土着の有力な国衆との同盟や連合といった比較的対等な関係で成り立っていました。そのため国主の信玄といえどもトップダウンで物事を決めるのは難しく、家臣団の利害や気持ちを十分に尊重しないと国政がままならなかった苦勞が偲ばれる言葉です。国でも会社でも組織を動かしていくのは最終的には『人』そのもの。時代は変わっても人の世で大切にしていかなければいけないのはお互いの心。そんな思いをこの言葉から感じる事ができました。